

教育長 様

校番 093 広島商業 高等学校長
(全日制 課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和4年度 実施報告書****1 学校の教育目標等****(1) 教育目標**

本校の教育目標は「幅広い教養とビジネスに必要な力を身に付け、社会の発展に貢献できる人財を育成する」と定めている。このことについては、4月当初の職員会議で校長から教職員に対して、教育目標を定めた意義等を説明するとともに、定例開催される教科主任会議や各教科会、各種研修会等を通して、共有化が図られている。

また、教育目標については、新しい学習指導要領の趣旨を的確に踏まえ、商業高校を卒業する生徒が高い専門性を発揮し、社会で活躍できる人財となるよう、校務運営会議等を通じて定期的に見直しが行われている。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

本校では、「主体的に計画を立て、粘り強く実行できる生徒 (Initiative & Self Reliance)」や「自分の考えを明確に表現し、他者を巻き込むことができる生徒 (Communication & Collaboration)」、「課題を発見し、解決のために考え抜くことができる生徒 (Critical Thinking & Problem Solving)」の育成を目指している。

そのため、短期（本年度）目標として、「各教科の見方・考え方を働かせ、論理的に考察させるとともに、的確に表現できる力を育成する」と定め、各教科において「本質的な問いを設定するとともに、育成したい資質・能力を見取るルーブリック評価を作成する」こととし、パフォーマンス課題の設定及びルーブリック評価の作成を行っている。

育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力についても、4月当初の職員会議で校長から教職員に対して意義等を説明するとともに、定例開催される教科主任会議や各教科会、各種研修会等を通して、共有化が図られている。また、教育目標同様、新しい学習指導要領の趣旨を的確に踏まえ、商業高校を卒業する生徒が高い専門性を発揮し、社会で活躍できる人財となるよう、校務運営会議等を通じて定期的に見直しが行われている。

(3) 学科等の特色

生徒の「個別最適な学び」を充実させるための教育課程を編成している。1学年は、商業科の基礎的科目である「ビジネス基礎」、「簿記」、「情報処理」を全員が共通的に学習し、2学年からは進路希望や適性に応じて選択履修等を行い、生徒の多様な進路希望や適性に応じた学びの選択を可能とするカリキュラムとした。課題発見・解決学習の充実を図るため、「ビジネス基礎」、「ビジネス探究」、「課題研究」を中心とした商業科目とともに、共通教科における探究的な学びを3学年の選択群に設定し、さらなる充実を図ることとしている。また、変化の激しい社会に柔軟に対応し、高度情報通信社会で活躍するための技術を習得させるため、2～3学年に科目「プログラミング」を設定するとともに、外部機関と連携し、教科の枠を超えた学びを充実させる「フレックス・タイム」を設置し、高度な知識・技術を身に付けさせるなど、生徒の多様な進路選択を実現させ、商業の専門性を高める教育課程を編成した。

2 研究の概要**(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標**

- 幅広い教養とビジネスに必要な力を身に付け、社会の発展に貢献することのできる人財育成
- 社会が抱える課題を認識し、科学的な根拠に基づいて、その解決を提案することのできる人財育成
- 社会で活用できる最先端のビジネススキルを身に付けさせるための教科横断的な探究活動の充実
- 変化の激しい社会に柔軟に対応し、高度情報通信社会で活躍するためのプログラミング技術の習得
- 外部機関との連携を強化し、高度な知識・技術を身に付けさせるための「フレックス・タイム」の導入

(2) 2年後の目指す学校の姿

- ・将来活用できる知識・技術等を確実に生徒に身に付けさせるとともに、課題解決力を備えた生徒を育成する。
- ・対人能力（リーダーシップ、コミュニケーション力、公共心、規範意識など）、自己制御力（意欲、忍耐力、自分らしい生き方や成功を追究する力など）を生徒に身に付けさせるとともに、主体的に計画を立て、粘り強く実行することができる生徒を育成する。
- ・使命感にあふれ、新たな価値に挑む教職員集団づくりを目指し、計画的・組織的なカリキュラム・マネジメントの充実を図る。

(3) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・「ビジネス基礎」、「ビジネス探究」等の系統性が整理され、それぞれの科目で身に付けさせたい資質・能力が明確になっており、資質・能力の習得を見取るためのルーブリックが作成されている。
- ・教科横断的な学習指導の具体的方策について、研修等を通じて、教員が明確に理解している。

イ アウトカム（成果目標）

- ・「ビジネス探究」における「NFTE Mindset（8つの資質・能力）」の評価3以上の生徒が70%以上になっている。
- ・教科横断的な学習活動の方策に関する研修会を実施後の教員アンケートで、「実践につなげることができる」とする肯定的評価が80%以上になっている。

(4) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

- ・商業科・科目「ビジネス基礎」（1学年）
- ・商業科・科目「ビジネス探究」（2学年）

イ カリキュラム開発の概要

本校では、教育目標に定める「幅広い教養とビジネスに必要な力を身に付け、社会の発展に貢献できる人財を育成する」ことを目指し、次の3つの資質・能力を生徒に育成するためのカリキュラムを開発する。

- ビジネスに係る最先端の知識・技術
- 新しいビジネスを創造する能力
- 他者と協働してよりよく課題を解決する能力

これらの3つの資質・能力を育成するために、カリキュラム開発に次の通り取り組んだ。

(マクロレベル)

- ・本校の商業教育の方向性を示した「教育の柱」を策定した。この5つの柱に基づいて、本校の教育内容を充実させるカリキュラムの構築を目指すこととした。(①高付加価値を生み出す人材育成 ②探究活動（STEAM教育）の充実 ③プログラミング教育の充実 ④投資教育の充実 ⑤XR教育の充実)
- ・今年度スタートの「フレックス・タイム」の授業では、教科の枠を超え、外部機関との連携による専門性の高い学習を実現した。PCVによる平和学習、Inspire Highによる多様性と価値観ワーク、TAC専門学校による公認会計士・税理士特別講座、先進的な起業家による動画作成、投資教育、XR教育などを行った。
- ・教務部を中心にマスタールーブリックを作成し、4月に全クラスに掲示することにより生徒に周知した。
- ・マスタールーブリックを基に、各教科や分掌、学年等でルーブリックやシラバス等の作成を行い、研究授業等に活用して取り組んだ。特に10月～11月の研究授業月間では、マスタールーブリックを基に各自が本質的な問いとパフォーマンス課題を設定し、授業研究に取り組んだ。学校全体または各教科で、生徒のどのような資質・能力を育成できているか、何が不足しているかを協議することができ、指導方法等を見直すことができた。
- ・核となるカリキュラムの「ビジネス基礎」「ビジネス探究」では昨年度に引き続き、指導内容や指導方法の改善を図るため、年間2回（4月・2月の事前事後）のルーブリック評価を行った。また、昨年度の分析結果からルーブリックの見直しを行い、より適切な基準（内容）となるように改善した。
- ・本校の「育てたい生徒像」と「育成を目指す資質・能力」が、教育活動によって達成できており、生徒自身が習得できていると実感できているかを調査することが必要と考え、2月に調査を実施した。4段階で評価し、「習得できている資質・能力」と「習得できていない資質・能力」を分析し、生徒自身が実感できるカリキュラムについて調査結果を分析・検証し、次年度の計画に反映させることとした。

(ミクロレベル)

- ・課題発見・解決学習の充実を目指し、公開研究授業、授業研修会を年間2回（6月・11月）開催した。6月（1回目）に本質的な問いとパフォーマンス課題について学び、各教科で年間通して取り組むとともに、10月

～11月の研究授業月間で授業研究に取り組んだ。11月（2回目）の授業研修会では、各自が授業で取り組んだ「できた点」、「できなかった点」を持ち寄り、教科を超えてグループで共有した。年間を通じて、PDCAサイクルを意識して課題発見・解決学習の推進に取り組むことで、学校全体と各教科で本校の現状の把握と、次年度以降に取り組むべき課題について考察することができた。

- ・「ビジネス基礎」、「ビジネス探究」において、年間2回のルーブリック評価の結果を活用し、担当者ミーティングを充実させ、指導内容や指導方法の改善を図った。これにより生徒の理解が深まり、教材活用方法や教員間で積極的な意見交流や授業改善が図られた。
- ・「ビジネス基礎」、「ビジネス探究」、「課題研究」は、課題発見・解決学習の核となるカリキュラムである。この3科目の系統性を確保し、段階的に学びが深まっているか、探究的な学びとなっているかについて再検討した。教科内での複数回の検討会議、アンケート調査を実施した。調査結果を基にカリキュラムの5つの柱に沿った講座内容を設定し、14講座から8講座へ変更するなど、「課題研究」について大幅に見直しを行った。
- ・「目標・指導・評価を一体化した授業づくり」を地理歴史科において行った。年間4回の会議の計画が2回しか開催できなかったが、担当指導主事からの指導を受け、核となるカリキュラムと教科の指導内容との関連付けなどを行った。成果物として、次年度に向けたシラバス、単元毎自己評価シート、単元テンプレート、単元指導計画など、完成度の高いものが作成できた。次年度は、公開研究授業（合同授業研究会）の教科担当となっており、今年度研究した内容を活用し、年間を通じて探究的な学びに係る授業実践を行う予定である。

ウ 校内体制

令和4年度は、教育課程プロジェクト会議（管理職・主幹教諭・教務主任・進路指導主事・商業学科主任等）を中心に、教科主任会、学年会、分掌会と連携した。また、カリキュラム開発と共に、本校の商業教育の方向性を示した「教育の柱」を策定した。また、それを実現するための必要経費の調整、外部機関との連携、外部人材の登用などについて、令和5年度に向けて、プロジェクト会議を中心に検討・改善した。

具体的には、教科主任会を毎週開催し、各教科の取組状況を把握した。また、学年主任会を定期開催し、生徒の発達段階に応じた適切な指導内容となるように情報共有を図った。教務部と商業教育推進部がプロジェクトの中心となり、「育てたい生徒像」と「育成を目指す資質・能力」が達成できるカリキュラム開発に必要な研修テーマを設定したり、研修内容について協議したりすることを通して、全ての教科、全ての教員が主体的に取り組めるように連携を図った。6月と11月に実施した年2回の公開研究授業と授業研修会では、10～11月を研究授業月間として各教科で課題発見・解決学習の授業実践を行うなど、全教員がPDCAサイクルを意識して参画できる体制を構築した。また、科目の系統性を多角的に検証するとともに、学校運営協議会や外部有識者と連携してカリキュラム開発を行った。山口大学の陳内秀樹准教授には昨年に引き続き、校内体制の構築と課題発見・解決学習の推進について指導をしていただいた。県外における他校の実践事例について情報提供を受けるとともに、昨年度からの本校の現状を把握した上で、全教員が参画して行う体制づくりについての指導・助言を受けた。

また、「プログラミングI」については、令和5年度から2学年において全クラス必修となるため、指導力向上とプログラミング教育の重要性に関する教員の理解を深めるため、通信講座の受講を推進したり、外部講師を招聘したりするなど、年8回の校内研修を開催し、研修環境を整えた。同じく、探究的な学習の推進についても、校内研修の開催や外部機関による研修について案内し、受講を促進した。次年度以降も引き続き校内体制の充実を図っていく。

(5) 学習評価

学習評価については、各教科の特性に応じた多面的な評価を随時行っている。令和4年度からは、1学年においてシラバス等を活用した学期ごとの自己評価に加え、単元ごとの自己評価シートを合わせて実施している。さらに、定期考査の各設問に「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」の観点を明示し、事後に分析することで、生徒の観点別の資質・能力の育成状況を見取り、学習内容や指導方法の改善に活かしている。

また、各教科で単元テンプレートを作成し、本質的な問いを設定し、パフォーマンス課題の設定及びルーブリック評価の作成・実施に取り組んだ。6月の公開研究授業と授業研修会でパフォーマンス課題を学び、それを各教科で実践し、11月の授業研修会で報告し合った。11月の研修後のアンケート調査では、パフォーマンス課題やルーブリックについての「理解が深まった」という肯定的回答が約90%、「パフォーマンス課題を授業で取り入れている」が72.7%と、約5カ月間で29.9%増加した。課題発見・解決学習のテーマとして設定し、PDCAサイクルを意識して研修会等を実施することで、教員の前向きに取り組む姿勢を創り出すことができるとともに、生徒の資質・能力の育成状況を見取り、学習や指導の改善に活かすことができた。

核となるカリキュラム（1学年「ビジネス基礎」・2学年「ビジネス探究」）では、育成したい資質・能力を見取るルーブリックについて作成・修正した。昨年度のルーブリックでは、生徒が具体的にどの力が習得できてどのレベルまで達しているかを具体的に読み取りづらく、十分に活かすことができないと考えた。今年度は、8つの資質・能力のレベル1～4を全て文章化し、レベルによる資質・能力の違いを下線で明示し、「自分がどのレベルにいる

か？」を生徒自身が判断して選択しやすいものとした。また、年間の成果目標を「レベル3以上が70%以上」とした。4月（1回目）の事前調査では、レベル3以上の生徒は、1学年が平均9.0%、2学年が平均32.4%と低かった。しかし、その結果を踏まえ、担当者ミーティングの充実や指導内容や指導方法の工夫を行った。1年間の学習を経て、2月（2回目）の事後調査では、レベル3以上の生徒は、1学年が平均79.1%、2学年が平均65.5%まで増加した。具体的にどの資質・能力が習得できているか、どのレベルまで達しているか、何の力が習得できていないと感じているかが、生徒も教員も理解でき、活用できるルーブリックに改善できたと考える。

(6) カリキュラム評価

本校は令和4年度から情報ビジネス科としてスタートした。本校の現状を分析し、社会の実情を踏まえ、新たに「教育の柱」を策定し、その実現に向け、次の通りカリキュラムについて評価し、改善に取り組んだ。

○1学年「ビジネス基礎」2学年「ビジネス探究」における昨年度のルーブリック評価の結果を踏まえ、担当者ミーティングを毎週開催し、指導内容と指導方法の工夫・改善を行った。令和5年2月に生徒への教育活動に係るアンケート調査を実施した。本校の教育活動に対して「幅広い教養を身に付けることができているか」という質問に対しては、肯定的回答が93.1%、「ビジネスに必要となる力を身に付けることができているか」については肯定的回答が94.4%と高い結果となった。肯定的回答をした生徒の主な理由としては「ビジネス基礎、ビジネス探究で学んでいるから」「課題を見付け、解決するアイデアを考えることができるから」「多様性や価値観について学ぶことができるから」などが挙げられており、探究的な学びによって、教科の枠を超えた幅広い学びができていると実感していることが分かった。しかし、「実感が持てない」、「社会と触れ合う機会が少ない」などを感じている生徒もいることが分かった。生徒の多様な学びの機会（場）を創出する工夫がさらに必要であると考えている。

○3学年「課題研究」について、1・2学年の探究学習から段階的に学びが深まり、系統性が確保できているか商業科会議で検討した。「開設講座のバランス取れていない」55.6%、「探究活動が不足している」77.8%、「開設講座の変更を行う必要がある」72.2%という調査結果から、「教育の柱」に沿った講座内容を検討し、令和5年度からは14講座から8講座とし、講座内容も大幅に変更した。

○1学年「フレックス・タイム」においては、複数の外部機関との連携を図り、投資教育やXR教育を始めとした専門性の高い学習内容や特別講座等を実施した。生徒の自己評価は「知識・技術が身に付いた」93.8%、「深く考えたり、新しいアイデアを考案したりすることができた」86.1%、「自ら進んで意欲的に学習した」84.6%、「他者と協力しながら取り組むことができた」96.2%といずれも高い評価結果となった。「多様性」や「自分の意見を持つこと」、「他者の意見を尊重すること」の重要性を意識していると回答した生徒が90%以上であるという結果からも、教科の枠を超えた学びが生徒の価値観を広げ、学びを深めていることが分かる。しかし、「自分が何かに貢献すること」や「自分の思い込みをできるだけ少なくすること」については90%に達しておらず、そうした部分に課題意識を持っている生徒がいることが分かった。

3 令和4年度の成果及び課題

(1) 成果

- ・1学年「ビジネス基礎」、2学年「ビジネス探究」について、マスタールーブリックを基に、各科目で身に付けさせたい資質・能力を明確にし、その習得状況を見取るルーブリックを修正・作成した。科目を学習する事前（4月）と事後（2月）にルーブリック評価を行い、生徒の資質・能力の習得状況を把握することができた。
- ・1学年「ビジネス基礎」は、ルーブリック評価の全体平均を見ると、レベル3以上が9.0%から79.1%へと大きく伸びた。1年間の授業で、生徒自身が資質・能力を大きく成長させることができたと感じていることが分かる。「情報収集能力」はレベル3以上が87.4%と高く、自分で様々な課題に対して調べる経験を重ねたことで、成長したと感じている生徒が多いことが分かった。「協調性」はレベル3以上が83.1%であり、そのうちレベル4が40.5%と最も高かった。グループワークを1年間行い、自分の考えと他者の考えの違いを理解するとともに、他者と協力しながら課題解決に取り組む力を習得できたと感じている生徒が多くいることが分かった。
- ・2学年「ビジネス探究」は、ルーブリック評価の全体平均を見ると、レベル3以上が32.4%（4月）から65.5%（2月）に倍増した。1年間の「ビジネス探究」の学習によって、資質・能力が向上したと生徒自身が感じていることが分かる。「転換力」や「意思決定力」、「コミュニケーション力・コラボレーション力」について、レベル3以上が70%以上であることから、高いレベルで習得できたと感じていることが分かった。「ビジネス探究」では、「社会の課題を自分自身がどう解決できるか？」という視点で考え、解決したい課題を自ら選択して解決策を考案することや、グループワークで他者と協働して考案することで、生徒自身が成長を実感していることが分かった。また、「独創的発想力」や「批判的思考力・課題発見解決力」は、レベル3以上が1回目より2回目の方が+36.8%、+36.2%と大きく増加した。ビジネスアイデアを考案するために、様々な学習による知識・技術、市場調査や収集した情報のデータ分析を実践し、活用した経験によって身に付いたと実感し、大きく数値が伸びたと考えている。

- ・教科横断的な学習指導の具体的方策について、年間2回の公開研究授業と授業研修会を開催した。教員対象の事後アンケートでは、「ルーブリックについて理解できた」87.9%、「パフォーマンス課題について理解できた」91.0%、「主体的な学びについて理解できた」94.0%と、いずれも肯定的評価が約90%で、1回目より全項目で数値が向上した。研修や授業研究によって全教員と共有化を図ったことにより、「本質的な問い設定すること」や「パフォーマンス課題を取り入れる」、「ルーブリックを作成し、評価をする」といった「課題発見・解決学習」を推進する必要性についての理解が深まり、「授業へ取り入れる参考になった」が96.9%と高い評価となり、教員の主体的に取り組む姿勢と、学校全体で取り組む協働体制の構築につながっている。
- ・令和5年2月に生徒を対象として教育活動に係るアンケート調査を実施した。「他者の意見に誠実に耳を傾け、取り入れる」や「より良い成果を目指して、チームで取り組むこと」について、それぞれ58.8%、54.2%の生徒が「とても意識している」と回答しており、協働的に取り組む力が高いレベルで身に付いていると生徒自身が実感していることが読み取れる。

(2) 課題

- ・教育活動に係るアンケート調査で、「幅広い教養を身に付けることができている」は肯定的回答が93.1%と高い結果であったが、回答のうち「どちらかといえばできている」が55.4%であり、半数以上となっている。「ビジネスに必要となる力を身に付けることができている」についても同様で、肯定的回答が94.4%、「どちらかといえばできている」が52.0%であった。「しっかりできている」と回答できるレベルになるためには、核となるカリキュラムだけでなく、他の教科で学んだ知識や技術に関連付けて活用し、社会における課題やその解決方法について考えを深め、まとめることが必要である。また、外部機関や専門家からの指導・助言を受ける多様な学びの場（機会）を提供し、さらに発展させる工夫が必要である。一方、「社会の発展に貢献できる力を身に付けている」は75.0%と、本校の教育目標達成についての3つの指標の中では一番低い結果となった。「実感が持てない」、「どのような力かわからない」など24.9%の生徒が否定的回答をしている。日頃の学習内容が活かされたと感じられる多様な学びの場（機会）の提供や、取組をフィードバックし、努力や成長を認識させる工夫が必要である。
- ・授業研修会の事後アンケートでは、「自分の授業で本質的な問いを投げかけている」と回答した教員は54.6%であった。本質的な問いを投げかけることの重要性は、研修等で理解できているが、取り入れ方や効果的な方法等に関する課題がある。このことについては、他県や他校での実践事例や、他教科での実践例を校内研修で共有し、授業で実践しやすい環境を作る。
- ・1学年「ビジネス基礎」のルーブリックの全体平均では、レベル1が2.9%、レベル2が18.0%、レベル3が45.3%、レベル4は33.8%であり、目標であるレベル3に達していない生徒が約20%いる。特に「知識・技術」と「計画実行力」でレベル2以下が多い。生徒自身が「資質・能力が習得できた」と高いレベルで実感し、レベル3から4へと上昇させるためには、最新の情報に触れさせるとともに、基礎的な知識から専門的な知識へ発展させること、課題に取り組む際に中間報告や中間評価を取り入れ、計画的な学習活動の定着させること、論理的な思考力を向上させるワークや発問を工夫したりすることなど、生徒の学びを深める手法を取り入れることが必要である。教員が丁寧にフィードバックを繰り返し行い、学びを深めさせる習慣付けが必要である。
- ・2学年「ビジネス探究」のルーブリックのうち、「適応力」が55.9%と低い。これは、「基礎的な知識・技術」は習得できているが、課題に柔軟に対応するだけの「高度な知識・技術」が足りていないと、生徒が課題意識を持っていることが分かる。発問やフィードバックを繰り返し、基礎から専門性の高いレベルに発展させるワークの工夫などが必要である。また、全体平均のレベル1が5.7%、レベル2が28.7%、レベル3は44.7%、レベル4が20.8%とレベル2以下が一定数いる。全体レベルを1段階上げるためには、最先端かつ独創的なビジネスの成功事例などの情報提供を頻繁に行い、専門性の高い知識・技術に触れる機会を創出し、生徒の興味・関心を高め、探究する意欲を醸成することが必要である。
- ・教育活動に係るアンケート調査で、身に付けるべき資質・能力の9つの設問で、「とても意識している」が高かったのは3つ、「どちらかといえば意識している」が高かったのが6つだった。重要性は十分意識しているが、自分の日頃の行動にまで結び付けられていない、自分はその段階までは達していないと、課題意識を持っている生徒が半数近くいることが分かった。

4 令和5年度の研究目標及び取組内容

(1) 令和5年度の研究目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・3年間で育てたい生徒像を明確にし、育成したい資質・能力が教科横断的に整理され、各教科・科目の授業において、具体的な指導内容や指導方法を描いたイメージマップを作成している。
- ・「ビジネス基礎」、「ビジネス探究」、「課題研究」等の系統性が整理され、それぞれの科目で身に付けさせたい資質・能力が明確になっており、資質・能力の習得を見取るためのルーブリックが作成されている。
- ・ルーブリック評価等を用いて、生徒の資質・能力の伸長が適切に評価されるとともに、個に応じたアドバイスが

なされるなど、個別最適な学びが実現されている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・「授業評価アンケート」等において、「教科横断的な授業の取組がなされている」と回答する教員・生徒の割合が80%以上になっている。
- ・「授業評価アンケート」等において、「個に応じた適切なアドバイスを行っている（なされている）」と肯定的評価をする教員・生徒の割合が80%以上になっている。

(2) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

教育目標に定める「幅広い教養とビジネスに必要な力を身に付け、社会の発展に貢献できる人財を育成する」ことを目指すとともに、令和5年度から育てたい生徒像を「主体的に計画を立て、粘り強く実行できる生徒」、「多様性を認め合う寛容さを持ち、他者と共生することができる生徒」、「課題を発見し、解決のために考え抜くことができる生徒」に変更し、その育成を目指していくカリキュラム開発に取り組む。

- ・「ビジネス基礎」（1学年）、「ビジネス探究」（2学年）、「課題研究」（3学年）における課題発見・解決学習の充実と系統性の確保
- ・3学年「課題研究」におけるルーブリック評価の作成
- ・ビジネスに係る最先端の知識・技術の育成（探究活動、投資教育、プログラミング教育、XR教育の充実）
- ・共通教科における課題発見・解決学習の授業実践

イ 校内体制

教育課程検討プロジェクト会議を中心に教科主任会議などと連携し、本校の教育目標や育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力を達成できるよう、実施状況や指導内容を分析・検証し、より適切なものとなるようにカリキュラムを開発する。また、パフォーマンス課題やルーブリック評価などについても研修会を開催し、指導と評価が適切に実施できるように工夫する。さらに、核となるカリキュラムとの関連付けや、科目の系統性を多角的に検証するとともに、学校運営協議会や課題発見・解決学習の実行委員会等でカリキュラム開発について外部有識者と連携することによって、社会に開かれた教育課程を編成していく。

- ・プロジェクト会議を中心としたカリキュラムの充実・改善
- ・探究学習コーディネーターの設置（最新の知識・技術を提供する人材の確保、市場ニーズや現状の把握）
- ・各学年に探究学習担当者を配置（外部機関や探究学習コーディネーターとの連携・推進）
- ・年間2回（6月・11月）の校内研修、11月の公開研究授業、各教科・科目による授業実践